

需要ゼロの研究領域

～古典語作文

須永哲矢

意図・目的をもって何事かに取り組み、その結果が何かの役に立ち、その先へつながっていく——「研究」とはそういうものだろう。しかし一方で、さまざまな分野の研究の歴史を見てみると、明確な、あるいは本来の意図や目的とは別のところから生まれた成果が、その先につながっていくこともまた多かったように思う。筆者は日本語学を専門分野としている。日本語学にも「王道」の研究課題はいくらでもあるが、結局のところ、好きでこの分野に取り組んでいる自分自身にとっては、この分野で共有されている「大切な課題」とは別に、個人的に大切にしたいこと、面白いと思えることがある。それこそ「余滴」としか言いようのない研究領域だが、この機会に筆者と学生たちが取り組んだ、需要ゼロの研究領域、「古典語作文」について書いてみたい。

1. 古典語作文とは何ぞ？

読んで字のごとく、古文を作文する、という行為である。一般的な英語教育であれば読むこと・書くこと・聞くこと・話すことが並行して指導されるが、国語の古典では、読むための学習だけが重ねられ、書いたり、聞いたり、話したり、という作業はまずしない。「英作文」という領域があっても「古作文」はないし、「英会話」があっても「古会話」はない。それは「必要性」という観点からは、考えるまでもなく当然のことである。英語と違って、現代において古典語話者はゼロ。古典語ネイティブは、はるか昔に全員お亡くなりになっているため、彼らから受け継いできた古典を現代のわれわれが「読む」ということはあっても、古典語ネイティブ相手に発信する、という需要は、タイムマシンもどうやら実現しそうな現代においては

存在しない。だからこそ、古典語を学ぶ、ということは実用面においては「読めるようになる」ことをゴールにするのであって、書いたり話したり、という能力は不要なのだ。

2. いかにして古典語作文を試みるに至りしか

古典作文は、上述のとおり必要ないものである。にもかかわらず、ここ数年、筆者は学生と古典作文に取り組んできた。

筆者は日本語日本文学科のプロジェクト科目、「古典学習教材開発プロジェクト」を担当してきた。2015年度あたりからゼミの学生を中心に、専門知識を学んだ上で、この間まで高校生として教わる側だった感覚を生かして、学習者目線で教材を作りたいという試みが始まり、2016年度よりプロジェクト科目として本格始動。3年かけて古典学習の要点として助動詞、単語、敬語、古典常識の4領域の教材のあり方をひとつと検討してきた。科目としては2018年度をもって一区切りをつけたが、現在も学生有志で活動は続いている。そんな活動の中で、「単語の教材作成」から今回の話は始まる。

単語教材の作成はこのプロジェクトの柱の一つであり、最初期からの課題であった。市販の単語帳はまだ語数が多すぎ、学習意欲がわからない。そこで実際に教科書に出てくる単語を洗い出し、その中の最重要単語を絞りに絞ったリストを作成し、「最低限」を示すことを目指した。

詳細は割愛するが、教職を目指していた学生が自力で高校の教科書をデータ化、機械処理をかけ統計を取った結果、「70語覚えると教科書の7割がカバーできる」という結論を導き出した（ちなみにこの作業をした学生は卒業し、中学の教員として活躍している）。この結果を受けて、教材として

の単語帳をつくる段になったのだが、そこで学生たちから出た意見が、「例文が欲しい」ということ。確かに単語の意味だけ書いてあってもわからないだろう。そこで電子データを利用した調査実習を兼ねて例文の収集をさせてみたのだが、いざ取り組んでみると落とし穴に出会う。見つけた例文がそろいもそろって難しすぎるのである。

たとえば、「はづかし」という単語がある。これには、今の意味での「恥ずかしい」に加え、「こちらが恥ずかしくなるくらい、相手が立派」という意味がある。そこで、この用法の例になりそうなものを古典作品本文から拾ってくると、こんな感じのものが見つかる。

宮も「かくはづかしき人参りたまふを、御心づかひ
して見えたてまつらせたまへ」と聞こえたまひけり。
(『源氏物語』絵合)

作っている教材は、必要基本単語を70語と極限まで絞ったことからわかるとおり、初歩の初歩の入門用を想定していた。そのレベルとして考えたとき、上のような実例は「はづかし」以外の部分もちゃんとした古文（当然のことだが）なので、文全体が難しく読めないのである。スポーツに例えるなら、ほんの少し、基本動作を習い始めたところでいきなりプロ選手と対戦するようなもの。勝てるわけがない。こんなレベルの場合、英語なら「This is a pen.」みたいな作例を、わかりやすく載せるところである。しかし、古文の参考書では、そろいもそろって文学作品からの実例を引っ張ってくる。それはなぜかと言ったら、ひとことで言えば“ネイティヴチェックの壁”である。英語の場合、ノンネイティヴが、学習上の都合に合わせて「This is a pen.」みたいな作文をしても、英語のネイティヴにチェックを受けることができる。ところが、古典語の場合、この世界にネイティヴが存在しないため、たとえばそれが平安時代語の文として本当に正しいのか、誰にもわからない。だから、チェック不能な作文なんていう無責任なことは、普通できるはずがない。それ以前に、古典語を作文するための方法も確立していない。古典語で発信するという需要がゼロなのだから、「ティラノサウルスの尻尾をおいしく調理する方法」が確立されていないのと同様、

当然のことである。だから、今までしてこなかったしできなかった。でも、「入門用の例文」ということを考えたら、無茶を承知でわかりやすい作例があったほうがいいんじゃないか、古文の例文を人工的な作例にしてわかりやすくする——本屋さんにはできない、無責任な実験が、この学生プロジェクトの遊びの範囲ならできるんじゃないか、そんな思いで、「古典語作文」についてうっかり、挑戦してしまった。

3. いかなる古文をば作るべき

「とりあえず用例を拾ってこよう」ということを越えて、教えた内容に合わせて自由に作文する、となると、考えることが増える。自由が広がるともいえるし、悩みが増えるともいえる。現存する有限の作品から拾うのではなく、「一から作っていい」となるとスタート地点から無限なのである。

そこで、学生と話しあって、「教材としての例文」に特化した古典語作文とは、どのようなものがふさわしいか、まずは方向性を検討した。そこで出てきたのは「該当単語以外は簡単な文。正確さの面では多少不自然な古文であっても、わかりやすさを優先しよう」「学習効率を考えて、どうせなら短い文の中に重要単語をてんこ盛りにしたい」などなど。その中で、のちに大きな柱となったのが「どうせ自由に作っていいのなら、例文全体が一つのお話仕立てになっているのはどうか」ということだった。今までの「ホンモノの古文」では、力がついてからでないとお話が読めない。さらに、実際の古典作品は長いため、一部分にしか触れられない場合も多い。完結した短いお話を最後まで読み通したら力がつく、というのは教材として理想的なんじゃないか。そんな思いが流れ込み、一文単位の作文でなく、古典語でお話を書こう、と企画は膨らんでいった。

お話を書く、と決まれば、それを前提にさらに考えるべきことは広がる。まず訳文はつけるのか。古典語を古典語として読んで感覚をつかんでほしい、という意図からは、訳文はつけたくない。となると、訳文なしで読めるためには、新規創作のお話ではなく、誰もが知っている話の古文訳が望ましい。誰もが知っている簡単なお話で、少ない分量で

すっきり終わる、となると昔話が真っ先に思い浮かぶが、「かぐやひめ」「うらしまたろう」など、日本の昔話はホンモノの古文版が当然あるわけで、古語訳することの意味がない。となると、海外の昔話、あるいは近現代のお話、ということに対象は絞られてきて、あとは入れたい単語とにらめっこして、こういう単語を使うような場面から逆算すると、こんな展開と人物が必要で……と、必要な要素を洗い出していき、単語学習用に「白雪姫」、敬語学習用に「走れメロス」を古文化しよう、との結論に達した。

4. 思ふやうには書かれざりけり

いよいよ実作である。

最初の作業は「ここでこの単語を使う」ということを意識して現代語で作文する、ということ。英作文をする際、英単語や英語の構文を意識して、訳しやすいように日本語で書く、というのと同じような作業である。

VER. 1 古典語訳を意識した現代語

昔むかし、あるところに……略……お妃がいました。
お妃は不思議な（→あやし）魔法の鏡を持っていて、
なんでも（→よろづ）魔法の鏡に尋ねます。

これをもとに、まず単語を古典語に置き換えてみる。すると、さまざまな無理が見えてくる。VER. 1 の下線部を古語化したのが下記 VER. 2 である。

VER. 2 単語を置き換え、古文っぽくした一次稿

①お妃②が③あり④侍り。⑤お妃はあやしき鏡をもち⑥てありて、⑦よろづも魔法の鏡に⑧尋ね侍り。

このようにいざ出来上がったものを読んでも、どうも古文っぽくない（どちらかというと、むしろ近代の文語文に近い感じ？）。

そこで、各所に感じた違和感を洗っていき、実際の古文を調べ直し、より古文らしいものに近づけていく。そもそも「読めるとしても書けるだけの力はなかった」、そして「単語を置き換えただけでは古文にならない」というのは

それ自体が発見だし、ある単語を入れるためにたまたま作った文の、他の箇所を古語化するのが難しかったりして、さらにいろいろな発見につながる。VER. 2 を例にとれば、このわずかな部分だけでも、①～⑦の「ひっかかり」が見つかった。

①「お妃」という言い方を古典でするだろうか？

実例をあたってみると、「妃」のままのほうが平安文学っぽさが出る。

②「が」はないほうが自然？

古典の文体では、「昔、男ありけり」であって、「昔、男がありけり」ではない。こういう「が」はないほうが自然。

③お話は「です・ます」→「侍り」でいいのか？

優しく語りかける感じで「です・ます」調でもとの文を書き、それを古文化して「侍り」文体にした。しかし、実際の古典の物語の文体を見てみると基本的には「けり」文体であるため、「けり」で言い切っていたほうが古文っぽくなる。

④「お妃は」という主語は、明示されるべきか？

古典語では、一文ごとにわざわざ前文と同一の主語を明示しないことのほうが多い。主語を消してしまうほうが古文っぽいのではないか。

⑤「～ている」のような表現をするか？

「持っている」を「持ちてありて」と訳してみたが「て＋いる」のような複合的な表現を古典語でするかという、あまり出てこない。

⑥「なんでも」を「よろづも」と訳してみたが気持ち悪い

「とりあえずこんな感じの意味」ということだけの知識では「作文」はできない、という事例。つながり方、使い方を意識しないと読むことはできても書くことはできない。

⑦「尋ね」の使い方は自然か？

現代ではこういうときに「尋ねる」と言うが、実例を調べ直してみると、「鏡よ鏡……」という程度の尋ね方の場合、「問ふ」のほうがしっくりきそう。

これらを調整していき、よりそれっぽくしたのが VER. 3 である。

VER. 3 問題点を修正した第二稿

妃あり。あやしき鏡をもち、よろづのことをその鏡に問ひけり。

ホンモノの古文を読み慣れている人にとってはまだまだ違和感の塊だろうが、そこそこになったのではないだろうか。この企画は「単語リスト」の付属品としてたまたまスタートしたのだが、「書く」ということを始めてみた結果、現代語と古典語のさまざまな差に出会い、理解を深める演習科目に取り組んだかのような経験が得られた気がする。助動詞、敬語、単語といった、すでに体系立てられたものを切り取って眺めるだけでは知りようのなかったことを、本来必要なさそうな作業が意外にも教えてくれた。それ自体が、勉強として収穫だったように思う。

5. いざ走れ、メロス

せっかくなので、実作した古作文の例をここに掲げる。多様な敬語を可能な限り盛り込むことを目指した「走れメロス」古典語版である。当時筆者は、雪のいと高う降りたる日、「あなや」という事態に陥り、——つまりは骨折して入院中だったのだが、自発的に活動が続けていた学生たちが、自力でほぼ仕上げてきた。不自然な点も目につき、正確さという点では心もとないが、個人的には思い出深い古文である。学生たちの活動成果としても、この機会に掲載する。

「走れメロス」 古文（平安時代）VER.

メロス、いみじく腹立ちけり。悪逆無道なる帝、いかにも見許すまじと心深く思ひけり。

これも今は昔、奈良にメロスなる男、妹とともに暮らしけり。メロス、世のまつりごと心得ねども、よこしまにはいみじうさとかりけり。

メロス、川越え山越え、十里離れたる都に至りぬ。メロスが妹、まめなる男と会はむとし、そのいそぎがために、メロス都まで出で立ちけり。

その都に友あり。名をばセリヌンティウスとなむ言ひける。メロス、セリヌンティウスを心にくく思ひ、たづねむとす。大路を歩けど、人少ななるけはひなり。メロスおいらかなる男なれど、やうやう危ぶみけり。翁のただ一人行くをとらへて問ふに、翁の言ふやう、「都をしろしめす帝、人あまた殺しあそばす。人はたのむべからずと思ほして、昨日大殿ごもるまでに六人いたづらになりぬ。帝が妃よりはじめ、つかうまつる人もはなくなりぬ。」と。聞きてメロス、「あさましき帝なり、見許すまじ」とて胸の炎を燃やしけり。

うちつけなる男ゆえ、すずろに内裏に押し入りけり。されども押し入りもあへず、さぶらふ近衛に捕へらる。メロスの懷に刀あり、これを見て皆ののしりあへり。帝おはしまして、「いやしき民なり、何をか成さむとする」とのたまふ。「民を助けむとぞ思ひたまふる」とたけく申し、戒められむとす。あながち許し乞ひたてまつらねど、「妹が婚儀をせまほし。三日ばかり給へ。婚儀の後とくまうでむ」と聞こゆ。「あさましきそらごとなり。え頼まず」とのたまはす。「さらば、都にある、吾が友セリヌンティウスを奉らむ。質としてもてなし給へ。三日の後のたそがれまでに参らずば、この男殺したまへ」と申しけり。帝、セリヌンティウスを召して捕へたまひ、メロス、まかりけり。

またの日の昼つかた、奈良に至りつ。宴がいそぎの後、まどろみけり。宵のほどおどろきて婿をたづね、「妻まうけ明日にせよ」ともよほしけり。婿の言ふやう、「いそぎ整はず。待ちたまへ」とかたくななれど、暁には説かれぬ。婚儀、午の刻に行はれ、人々遊びたのしみけり。メロスばかりの男といへど、飽かず惜しく思ひけり。妹に祝言し、婿に「吾もいそぎ整はず。

互ひのことにてあり」とて退き、少しの眠りの後、暁に出で立たむと眠りけり。

日高うなるまで眠り過ぎて、「あな、こはいかに」と騒げども、やがて思ひしづまりけり。のどかなるさまにて出で立ちけり。されども、道すがら川の水溢れ、帝つかはしたる山がつ三人に妨げられ、つひに進まざりけり。物に襲はるる心地して、「足動かずとも、走るべし」とからうじて心を取り返し、はふはふ走り始めたり。「走れメロス。吾が頼めし友ぞ待つ」とみづからをはげましけり。犬など蹴つつ走れり。メロスの走るやう、日の沈むより早かりけり。

かくてメロス、風のごとく帰り参りつ。「メロスぞ戻りつる。」間に合ひぬ。「許すべし」と人々感じあへり。セリヌンティウス、許さるめり。互ひにうつし心を失ひしを詫び、頬を叩きあひ、抱きあひてうち泣きける。帝御覧じて、「あないみじ。吾もともがらに数まへたまへ」とのたまはす。人々これ聞きて「帝万歳」と叫びけり。

ここにひとりの女子、メロスがもとに緋色の衣奉りけり。セリヌンティウスの言ふやう、「はや衣奉れ。君の衣なく、あらはなるこそ口惜しけれ。」メロス、いたくかかやきたまひけり。

6. せざらましかば、知らざらまし

この作文実験の機会は、プロジェクト企画のたまたまの流れで始めたことであり、結果生成物としての「新たに作った古典語の文章」自体も、普通に考えると役立つ機会はない。古典語作文のノウハウができたところで、実用のためにそれを活用する機会もない。しかし、「古文を作文する」という行為を結果としてでなく、手段としてとらえた場合、その価値は変わってくるような気がする。「古典語を学ぶ」という、広い目的意識において、「作文させてみる」という手段は有効なのではないか、ということだ。

古文を作文することは、「何の役に立つのか」という観点からしたら、古典語ネイティブが存在しない以上、一次的には何の役にも立たない。しかし、その作業自体が、古

典語をより深く知るための手段として、どうやら大いに役に立つのだ。読めればいいんだから、書こうなんて思わない。でも、書いてみたらわかることがあって、わかった後なら、「そりゃ言語なんだから、読むだけじゃ足りないよな」という当然のことに気づく。しかもその当然のことは「需要」「役に立つのか」の陰に隠れて、やってみる前に見えなくなってしまうことが多い。そもそもわれわれは、本当の意味で「役に立つのか」を判断できているのだろうか。それ自体、実は疑わしいと思っている。

7. 役にこそ立たね

何かを学ぶ、というとき、まずは「これをやると何ができるようになるのか」に目が向く。自分にはこういう目標があって、そのためにこの力をつける、というのは将来設計として重要な視点であることに疑いの余地はない。だが一方で、「これは役に立たなそうだからやらなくていい」という裏命題みたいな考え方も同じように認めてしまっているのか、というところには大いに疑念が残る。「AならばB」が成り立つからといって、「AでないならBでない」と言える保証はない、というのは、ものの考え方の基礎の基礎。

文学を学んだところで何の役に立つのか、もともと使っている日本語を、日本人がいまさら研究して何の役に立つのか。自分が学生だった頃、こんな問いに対して、先生方はまずは「基礎体力」と答えていた。そして学生だった当時の私は、「そんな風にしか言えないんだから、やっぱり役には立たないんだろうな、好きだけど」と正直思っていた。

「読み書き」という基礎体力。もともとこういった類の勉強をする、というのは腕立て伏せ・腹筋・背筋みたいなものではないかと思う。腕立て伏せをどれだけ積み重ねたところで、「女子腕立て伏せ」というオリンピック種目があるわけではない。その先、サッカーを始めたにせよ、バスケの道に進んだにせよ、どんな競技であっても、試合本番で腕立て伏せの動きそのものをすることは、きっと一度もない。しかし、この事実をもって、腕立て伏せは役に立たない、と結論づけられたりはしない。その動き“そのも

の”が役に立つか、ということを超えて、その動き“を通して”身についた体力が、根本的に役に立つことを、経験的に信じているから。そして、どんな競技をするにせよ、それ以前に腕立て伏せや腹筋といった動きで身につけた基礎体力がなければ、試合で使える技術論云々は何の役にも立たない。「この局面でこう使う」という用途は存在しない基礎鍛錬が、それでも経験的に受け継がれてきたことにはそれなりの理由があって、表層的な「役に立つか」というレベルでなく、もっと根本的なところで役に立っていたりするのではないか。

国語教育の現場では、高校でこんな話を聞いたことがある。漢文の必要性が下がったため、漢文の教育を減らした結果、なぜか生徒の論理的思考力が落ちた気がする、というのだ。表面的にわかりやすい因果関係以外のところで、何かが意外なところがつながっていて、影響を及ぼしていたりする。古文の作文も、それ自体は「まったく役に立たないこと」なのだが、その結果見えてきたこと、学生の身についたことは確実にある。これって、「腕は使わない競技だから、いままで腹筋だけでいいかと思っていたけど、やっぱり腕立て伏せも必要だったよね」というようなことなのかもしれない。

現代において「すぐ役に立つこと」というのは、「スキル」「必勝テク」と言いかえてもよさそうだ。そしてそういった価値判断は、学問分野に限らず、資格試験とか、就職活動とか、いろいろな場面で広がりすぎてしまったのではないか。「面接を突破する必勝テク」があったとして、「人と向き合い、人と話している」という土台の感覚を忘れたままその技術を身につけたところで、最後の最後、幸せになれる気がしないのはなぜだろう。「役に立つ大事なこと」と言っても、実はそれには何層もレベルがあって、現代的な「役に立つか」という線が、たまたまあるレベルに設定され、それ以外の層が見えにくくなっているだけなのではないか。

現代的な「役に立つスキル」というのは、きっとソフトウェア。そして、「読み書き」に代表される言語能力はそれを下支えるハードウェア。最先端の優秀なソフトがあっても、ハードウェアが脆弱だったら使い物にならない。

ソフトウェアとしての技術論は日々進化する。最新バージョンを追いかけるだけでも大変な時代になった。それでも、「試合で勝てる技術」だけで基礎体力をおろそかにしたら結局勝てない。しかもこの地味な基礎トレーニング、実は「めんどくさいからついおろそかにしがちなだけで、やればすぐ誰でもちゃんとできる」というものでもない。筆者は雪道で「あなや」となった後、無事回復しリハビリに入り、筋トレを始めるに至ったが、そこで教わった「ちゃんとした腹筋」は、負荷のかかり方が全然違った。リハビリの先生からしたら、多くの日本人は腹筋運動が「できていない」のだそうだ。「何回やった」とか言いながら、できている気になっているにもかかわらず。古くから学びの基礎と位置づけられてきた「読み書き」——、こういった力と、その力をつけるための鍛錬も、これと同じような気がしてならない。実はなかなかちゃんとできないし、そのことに気づかれてもいない。

あるレベルでは需要ゼロで、役に立たないこと。誰でもわかるような短絡的な結果というレベルでなく、それが実際のところどう機能するのかをきちんと見極めるのも、専門家に課せられた課題なのだと思う。そこに確かに存在する意義を、うまいこと言い当てて学生諸君に伝えられないものか。今は「筋トレ」としか言えないけれど。

(すなが てつや 日本語日本文学科)